（様式1）

令和7年度　学力向上指導改善プラン

すずかけ台小学校長　荒井　隆一

学校教育目標	夢に向かって共に歩むすずかけっ子の育成
推進主体	学力向上委員会（管理職と主幹教諭・研究推進担当・生徒指導担当を中心とする）を設置して実施する。

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等	学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標（指標となる数値等）	具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
				4月			2～3月	
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問調査の結果も含む）	国語	○正答率は全国平均を5ポイント上回った。国語力は概ね定着している。 ○「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」ともに全国平均を上回った。 ○記述式2問の正答率は全国平均を7ポイント上回った。目的や条件に応じた文を書く力が定着している。	1.授業スタイルの確立 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・めあての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返り の学び方の流れを共通理解し、実践する。	・ふり返りの記述をもとに評価 ※めあてに沿った学びを具体的に書く。 ※自分の考えの変化を書く。 ※参考になった意見を書く。 ・多様なグループ、ペア・全体交流を授業に取り入れ、授業の活性化を図り、児童の学習意欲を高める。	・研究の方向性、年間計画、授業作り、ICTの活用方法などを確認する。（年度初めの研推研修） ・めあてや学び方の明示及びめあてを意識したふり返りを書かせる。 ・課題設定の工夫、効果的な言語活動を重視する。 ・一人学びで自分の考えを持ったうえでの交流をする。 ・ペアトーク、グループトーク、全体交流を組み合わせた学びの分かち合いを授業に取り入れ、ふり返りで学びを見取る。		
		算数数学	○正答率は全国平均を5ポイント上回った。算数の力は概ね定着している。 ○記述式の問題の正答率は全国平均を8ポイント上回った。また、無回答率は0%だった。 ◆「変化と関係」領域の正答率は48.4%で、全国平均を3.3%下回った。日頃の授業で図や表を用いて数量関係を整理したり、正しい量感を吟味する力には課題がある。	2.思考力・判断力・表現力を育成する。 ○研究推進による主体的な学びづくり ・年間を見通した学習計画・指導案づくり ・実践事例の交流 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導（タブレット活用も含む） ○考える力の育成 ・学習内容を日常生活とつなげる ・授業の終末の工夫	・共通の教材分析シートを活用した授業づくりを行い、思考力の育成を目指す。 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有できている。 ・ワークシートやノートに自らの考えや友達の考えなどを書き、学習の成果や価値を残すことができる。 ・図、表等具体的な資料を用いながら物事、数量の関係を捉え説明できている。 ・めあてに対してふり返りを書き、身についた学びを意識できている。 ・適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする。 ・学力テストの考えや解き方を記述で説明する問題で、前年度のポイントを上回る。	・段階に応じたノートの書き方を指導する。（課題・式・図表・理由、ポイントの記入） ・自らの考え、思考過程、解法の理由・根拠の記入を指導する。 ・一人学び、図や表・ふり返りのかき方のモデルを提示する。 ・タブレットを使ったプレゼンテーション活動（高学年）を進める。 ・「相互交流場面の工夫・充実」に視点をおいた指導案の作成する。 ・児童自らが見通しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくりを進める。 ・日頃の授業で、図や表を用いて数量関係を整理し、問題に取り組む習慣をつけていく。また、具体をイメージしやすいように数字の意味を問うて、子どもたちが数字の意味を説明する機会を大切にする。また、「○○くらい」などの量感を意識できるようような実体験に結びつく活動を大切にする。		
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○学期末のまとめテストにおいて、国語や算数の基礎学力がおおむね定着していると判断できる。					
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○児童が課題に対して自分の考えを持ち、話し合うことを大切にした授業づくりを進めており、学習の流れを理解し、積極的に取り組む児童が増えている。話し合い場面で発言したり、考えをノート、ポートフォリオ等にまとめたりする学び方を学年に応じて学んできている。 ◆わかりやすく話すことのできる児童は多いが、発表について苦手意識を持つ児童もおり、発言する児童が固定化する傾向にある。	3.ICT機器の活用による主体的な学びづくりをすすめる。 ○授業の中での効果的に活用する。 ○実践事例を交流する。	・ICT機器を授業で活用し、実践交流会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有する。 ・児童のICT機器活用を日常化させる。 ・学年に応じたICT活用スキルを身に着ける。	・ICTを活用して児童の思考力を育てる実践事例を共有・活用（実践記録交流会）する。 ・「オクリンク」「ムーブノート」「オクリンクプラス」等を使った効果的な交流学習のあり方を開発・共有する。		
学力向上に係る学習習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問の状況		○朝食、就寝、起床時刻など、学力を支える生活習慣に関する項目については、概ね良好な結果であった。 ◆家庭での学習時間が30分以上の児童が72.5%と、全国平均を9ポイントも下回る。家庭での学習習慣の定着について課題がある。 ○ICT機器活用は進んでいる。特に「分からないところがあったときにすぐ調べることができる」の回答は76%と全国平均を18ポイント上回っている。ICTの効果を実感している。					
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○家庭での会話、学習、手伝い等は良好である。 ◆児童の生活習慣の変化に伴い、読書活動の時間の確保が課題である。					
授業改善	・主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善 ・ICT機器を効果的に活用（クラウド環境を活かした授業実施等）		○昨年度まで思考力に焦点化した研究を行ってきたこともあり、教師自身が思考力の種類を理解し、授業構成上で意識して取り組むことができた。 ◆今年度より教科を道徳科に絞り、授業構成を研究していく。児童が深く考え、より多くの発言が生まれる授業を構成することで、内容項目を理解できる児童が増えると考える。 ○ICTの活用は学校全体として広がりつつある。 ◆ICT機器を活用し、自分の考えを発信することはできるが、集まった意見を交流に活用したり、自分の意見を練り直したりすることには課題がある。	4.自主学習と読書活動を推進する。 ○家庭での自主学習の習慣を定着させる。 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員会と連携し、読書の機会を増やす。	・児童が個に合った課題を設定し、家庭で主体的に自主学習に取り組む姿勢が定着している。（学校評価・児童による評価より） ・読書アンケート「読書が好きですか」の項目で肯定意見80%以上を目指す。 ・電子図書館活用人数、冊数を増やす。	・低・中・高学年用の「自学の進め方」を配布し、学年に応じて自主学習への主体的な姿勢の定着に取り組む。 ・学習内容を日常生活や未来につなげることで、もっと知りたいという気持ちを刺激する。 ・職員間で自主学習の研修を行う実践交流会を行う。 ・毎日、読書タイムを実施する。 ・毎月「家庭読書の日」は宿題を読書にし、家庭での読書時間を確保する。 ・本をコミュニケーションのツールとして使用する。		
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		○児童自らが見通しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくりを行った。 ○「教科書分析」「個別・朝学習」「ノート、タブレット」の3チームに分かれた研究推進チーム会の実施及び成果の共有を図った。特に「教科書分析チーム」によって、中学校の教科書を分析し、思考力の系統を明らかにした。	5.個別指導の充実を図る。 ○朝学習・補充学習の充実と、つまずきが見られる児童への個別指導の推進する。 ○基礎的な内容について日常的な指導を工夫する。	・計算や漢字の小テストを個の課題に応じて取り組み、計算力・漢字力が伸びている。 ・各教科学習で漢字・計算などの基礎的な力を使い、生かせるようにする。	・「がんばりタイム」による個別指導の充実を図る。 ・個々の課題に応じたプリントやタブレット学習の反復による漢字・計算の定着を図る。 ・ドリルパークを活用し、個の課題に応じた計算や漢字学習を推進する。 ・復習項目（ポイントやキーワード）を使ったまとめ等、復習の仕方、復習ノートの作成の仕方を指導する。		
	校内研修の状況		○事前研・事後研を位置づけた公開授業研修の充実を図った ○実践記録を通して、お互いの実践の価値や課題を共有した。 ※特にICT機器を活用して児童の思考力を育てる実践事例を共有・活用する実践記録交流会を実施した。					
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況		◆家庭では宿題をしているが、読書、自主学習を行う児童の割合が少ない。（経年） ◆「地域の行事に参加している」の回答が58%に留まっている。	6.学校園所の連携を通して学びの円滑な接続を目指す。	・中学校区共通の「目指す子ども像」の実現に向けたカリキュラムに沿って教育活動が進められている。 ・中学校の学習内容を踏まえ、9年間の学びを見通した実践を進めている。	・年間を通じた学校園所の継続的・計画的な交流を実施する。 ・けやき台中校区で「めざす子ども像」に向けたカリキュラムを作成する。		
	小・中における教科連携等の状況		○オープンスクールの参観、生徒指導連絡会、学校園所連携会議などを行っている。教科学習の円滑な接続を目指している。 ◆今後、中学校区で小中を見通したカリキュラムを作成する必要がある。	7.家庭や地域と連携し、学びを深める機会や学びの場を増やす。	・年2回の児童・保護者アンケートから、地域連携に関する項目の肯定的意見が80%以上を目指す。 ・地域支援ボランティアとの連携が計画的に進め、学校の中で地域の方が活躍し、児童の学びの充実を図る。	・学校運営協議会を母体とし、児童の興味に合わせた学びの場の提供を進める。 ・地域コーディネーターと校内地域連携担当を中心に、学校支援ボランティアと連携した授業を工夫、推進する。		